第二十六回「児童・生徒の平和メッセージ展」作文部門　高等学校の部　優秀賞

平和の架け橋

沖縄県立 開邦高等学校　二年　喜屋武　遥

私の祖母はとてもたくましい女性だ。御年八十一歳にして近くのスーパーから家まで約一キロの距離をバケツ一杯分もの洗剤を腕に抱えて徒歩で帰ってきたり、賞味期限がとっくの昔に過ぎている、冷蔵庫の奥で発見された変色しているバターをオーガニックの下剤と言ってパンに塗ろうとしたり、私達家族が驚くようなことを時々する。そんな大胆な彼女の行動を見たり聞いたりしたときに、私の母が必ず口にする言葉がある。

「やっぱり、あの戦争や戦後の動乱を生き抜いたおばあは、ただ者じゃないね。とてもたくましくて強いね。」

沖縄にアメリカ軍が上陸したのは祖母が十才だった頃。幼い妹二人を連れて、家族や親せきと共に具志川(現在のうるま市)から北へ北へとひたすら歩いたという。その途中亀甲墓の中に入り息をひそめてじっとすごす日もあったらしい。その話を聞いた当時小学生だった私はこんな質問をした。

「おばあ、墓の中にいて幽霊とか怖くなかったの。」

すると祖母はこう答えた。

「はっさ、幽霊も元々は生きた人間さ。なんで恐がるわけ。あの時は幽霊なんて気にする余裕も無かったし、誰かも分からないお墓の住人に、私達を守って下さい。お願いします。と祈ったよ。」

十才の祖母は墓の中でどれほどの恐怖を抱えていたのだろうか。想像することはできても経験者ではない私の想像なんてとてもなまぬるく薄っぺらいものなのだろう。そしてこの祖母の話に大変だったね、と相槌を打った当時の私は本当に何にも理解していなかったに違いない。しかし、戦争について、理解力のない幼いころから毎年学んできたからこそ、その下地をもって、今、祖母の話の重さ、深さをようやく理解しだしたのではないだろうか。

平和教育の大切さを身を持って経験したこんなエピソードがある。私が去年アメリカに留学したとき、アメリカ史のクラスで第二次世界大戦についてアメリカ側の視点から学んだ。その時に見た映画のワンシーンに真珠湾攻撃があったのだが、その内容に少し違和感を感じた。海の向こうから飛んでくるたくさんせのゼロ戦に戸惑う人々そしてそれに果敢に立ち向かうアメリカの若者達。バキュンバキュンとゼロ戦を打ち落とし、ついに日本の空軍を追い払い港は歓喜につつまれる。アメリカの若者は勇猛果敢で素晴らしい。そんな終わり方に戸惑った。また、授業も終盤にさしかかり原爆についてその映像を見てクラスメイトの何名かがクール、アウサム(素晴らしい)と言った。私はとても驚いた。この映像のどこをどうとらえたらそんな感想が浮かんでくるのだろうか。文化が違う、教育が違うとはこういうことなのだと痛感した。その時彼らに異論を唱えることが出来る程の英語力がない自分がとても情けなかった。エンターテイメント化された戦争映画を見て、戦争の悲惨さを何かとすり変えてはダメだ、と強く思った。主観を取り除くことは難しいが、中立な立場で戦争と向き合い、原因をとらえそれを未来の平和へと生かすことが平和教育において大事なことではないか。

戦争について考えるとき、必ず我々にできる事はなにか、という疑問がセットでついてくる。ただの高校生でしかない私にできる事とはどんな事だろうか。私は、私自身が架け橋となることだと思う。幸いにも、私たち世代は経験者の声を生で聞くことができた。日中は墓の中でじっと息を殺していたこと。昆虫でも雑草でも木の根でも、飢えをしのぐために口に詰め込んだこと。捕虜となりその時初めて食べたチョコレートのおいしさ。それを次の世代に継ぐことは私達若者の義務である。私は経験者ではない。だからその悲劇さを百パーセント伝えることは困難だろう。しかし、祖母が辛い記憶を呼び起こしてまで私に伝えた事をしっかりと心に縫いとめておきたい。時と共に薄れさせない。架け橋となって次の世代に伝えたい。他国の人々と交流したときに、お互いの意見を交換し合い、その人、ひいてはその国との架け橋となり平和に貢献していきたい。百年後、二百年後でも壊れないような平和の架け橋を築くために、たくさんの人と交流して、繋がっていくこと。それが今私にできる事だ。